

目次

はじめに

7

第一章

フエルメールとガードナー美術館盗難事件

進化するフエルメール研究／フエルメールは三五枚？ 三六枚？／フエルメールと邸宅美術館／イザベラ・スチュワート・ガードナーという個性的な女性／〈合奏〉がガードナー夫人のものになるまでの旅路／「来歴」にはおもしろい物語が詰まっている／盗難事件は聖パトリック記念日に起こった／犯人たちの不思議な選択

11

第二章

美術品盗難の奇妙な世界

美術品盗難の頻度や被害額は？／数が少ないフエルメールがなぜ盗まれたのか／美術品盗難の動機／最大の動機は盗んだ美術品の換金／世界最大の盗難美術品データベースALLR／名画なら盗品でも高く売れるだろう、という誤解／盗難美術品を人質にする／政治的・倫理的動機で絵を盗む

45

第三章

ガードナー美術館盗難事件の捜査、 最初の二三年間

〈合奏〉を含む一三点が盗難に遭う／盗まれた絵画——一枚の不思議な組み合わせ／レンブラント盗難には感じられる強い意志／フェルメールは巻き添え、勘違いで盗まれた!?／捜査は美術館の職員を徹底的に洗うことから／免責と報獎金目当ての仲介者登場／伝説の美術品強盗、マイルス・コナー

第四章

〈恋文〉と〈ギターを弾く女〉事件

東パキスタンの飢餓を救うために〈恋文〉を盗む／ヒーローになった犯人、テイル／盗難で受けた傷の修復方法にも議論が／美術品盗難が多発した一九七一年／IRAが〈ギターを弾く女〉を狙う?／美術品盗難の理由、有力なふたつの可能性／服役中のIRAメンバーの移送を求める

第五章

〈手紙を書く女と召使い〉、最初の盗難事件

ダブリン郊外、ラスボロー・ハウス／フランス語アクセントの謎の女／〈ギターを弾く

女〉盗難との関連／革命的な思想に動かされた上流階級の令嬢／「フェルメールは送り返した」と伝える電話／盗難後の修復による思わぬ収獲／盗難後の修復が〈手紙を書く女と召使い〉の新解釈をもたらす

第六章

一七世紀、フェルメールのコレクターたち

フェルメール家はパン屋に借金があった／年代順ではなく、都市別にフェルメールを見る／パトロロンがいたから、丁寧に絵を描くことができた／ディシウス競売に出た二枚のフェルメール／ファン・ライフェン以外のフェルメールのコレクター／〈ギターを弾く女〉も〈合奏〉もファン・ライフェンが持っていた？／めまぐるしく持ち主が変わった〈手紙を書く女と召使い〉

第七章

〈手紙を書く女と召使い〉、二度目の盗難事件

再度の強盗は計画性が高い犯罪／個人コレクションは前時代の遺物／窃盗は易し、換金は難し／プロテスタント系テロ組織と取引して、IRAの怒りを買う／フェルメールが戻ってきたのは七年半後／フェルメールの透視図法技術を発見／ラスボロー・ハウス、三度目、四度目の絵画盗難

第八章

今、〈合奏〉はどこに？

犯人はわかったが、絵はどこにあるか不明／ボストンのギャングの大ボス、ホワイティ・バルジャー逮捕の影響／見えてきた事件の輪郭／レンブラントを盗むという伝説的犯罪のインパクト／ガードナー美術館強盗実行犯二人はすでに死亡／絵の保管場所はメインからコネティカットへ／絵につながる情報を持つ最後の人物／一枚の絵は、まだ無事なのか？

おわりに

参考文献

本書掲載のフェルメール作品の制作年代は

ウォルター・リドケ(Walter Liedtke)著

『フェルメール全作品(Vermeer: The Complete Paintings)』に拠る。

はじめに

一九九〇年三月一八日、ボストンのイザベラ・スチュワート・ガードナー美術館から、フェルメールの〈合奏〉、レンブラントの〈ガリラの海の嵐〉、マネの〈トルトニ亭にて〉などの絵画を含めた一三点の美術品が盗まれた。被害総額は現在約五億ドルとされており、史上最大の美術品盗難事件という不名誉なタイトルを頂戴したまま今に至っている。そう、この盗難事件は、発生から二八年経った現在も未解決で、作品もどこにあるのかわからない状態なのだ。

この事件は、ノンフィクションの書き手としての私の仕事の出発点でもあった。私はガードナー美術館盗難事件がきっかけで、その他にもフェルメールが盗まれた事件が四件起こっていたことに気がつき、それらを調査・取材して、二〇〇〇年に『盗まれたフェルメール』（新潮選書）を上梓した。この本を書き終えた時点では、ガードナー美術館で起きた

強盗事件は、最初に噂されていたように悪徳コレクターに依頼された強盗やIRA（アイランド共和軍）による犯行などではなく、ボストン周辺の犯罪者グループによるものだという輪郭が、うっすらとだが見えてきていた。

『盗まれたフェルメール』を書いたことがきっかけで、日常的な題材を描きながらも見た人を深遠な気持ちに誘い込むフェルメールの魅力にすっかり取り憑かれた私は、世界に散らばるフェルメールの三十数枚の絵を全部見るという取材の旅に出て『フェルメール全点踏破の旅』（集英社新書ヴィジュアル版）を書いた。そしてその間も、その後も、ガードナー美術館事件の捜査状況をフォローしたり、取材したりしながら、事件の全貌が解明され、盗まれた〈合奏〉をはじめとした美術品が戻ってくる日を待った。ガードナー事件は美術品強盗事件の中でも特に好奇心を刺激する事件だったし、何よりも〈合奏〉を見なければ、真のフェルメール全点踏破を達成することはできなかったからだ。

そして二〇一三年三月一八日、ガードナー事件からきっかり二三年が経った日に、FBI（米連邦捜査局）はボストンで記者会見を行い、「盗難犯の身元を突き止めた。絵はコネティカットからフィラデルフィアへ運ばれたことがわかってる」という爆弾発表を行った。しかし、この発表の内容は、誰にとっても満足ができるものではなかった。犯人の名

前は伏せられ、絵もその時点ではどこにあるのか把握できてはいない、というものだったからだ。

それから五年半経った今、このFBIの発表時から状況はほとんど変わっていない。いや、私に言わせれば、むしろ悪くなっている。そう思う理由は、一つには報奨金を巡る状況にある。

ガードナー美術館は盗難直後に、作品返還につながる情報に対する謝礼として一〇〇万ドルの報奨金を支払うと発表した。一九九七年、金額は五〇〇万ドルに増額され、この報奨金を目当てにウィリアム・ヤングワースとマイルス・コナーという二人の犯罪者が返還交渉の仲介役を名乗り出た。しかし、コナーとヤングワースに加え、FBI、検察、美術館、メディアなど立場が違う複数の関係者の意向が錯綜し、交渉は決裂した。絵は戻ってこなかったが、条件が整えば戻ってくるだろうという感触は残った。

そして二〇一七年、報奨金はさらに増額されて一〇〇万ドル（約一億円）となった。盗んだ絵を合法的な市場で売却することが不可能な現在、報奨金は犯人グループが手に入れることができる唯一の現金だ。しかも、すでに窃盗罪は公訴時効が成立しており、他の罪状に関してもFBIは刑事免責を保障している。しかし、誰も絵の在り処につながるヒ

ントを持っていると言っていない。老練な情報提供者が絵の保管場所を知っているような犯罪者に接触しても、成果が上がらないのだ……。それはなぜなのだろう。

私は『盗まれたフェルメール』の終章の最後で、おそらく報奨金が目当ての返還交渉が成立したときに〈合奏〉はガードナー美術館に戻ってくるだろう、と書いた。しかし、この事件をフォローするようになって二〇年が経過した今、自分の中の希望がどんどん小さくなってきているのを感じる。

その理由をこの本でお話したいと思う。

この間、フェルメールを巡る状況も大きく変化した。フェルメールはダ・ヴィンチと肩を並べるほどの人気画家となり、世界中で展覧会が行われるようになった。それと並行してフェルメール研究も大きく進歩した。本書ではその進歩の一端にも触れ、今、フェルメールの世界ではどんなことが話題になっているのかも探ってみたい。

次の立ち読み箇所続きます

二六三年頃）、〈少女〉（一六六五～六七一年頃）、〈窓辺で水差しを持つ女〉（一六六二年頃）、〈眠る女〉（一六五六～五七年頃）、〈信仰の寓意〉（一六七〇～七二年頃）も、すべてコレクターから贈与された作品である。ニューヨークにフェルメールが集まっているのは、絵画の移動の歴史から見ると自然な流れだった。こういった移動が、あるときにはその絵の運命や価値を変える可能性も大いにあるのだ。

盗難事件は聖パトリック記念日に起こった

ガードナー美術館に強盗が入ったのは、一九九〇年三月一七日が一八日に変わってしばらくした頃である。

三月一七日は聖パトリック記念日だった。聖パトリックは四世紀末に生まれ、ヨーロッパ大陸で神学を学んでアイルランドにキリスト教をもたらした司教で、アイルランドの守護聖人と見なされている。三月一七日はこの聖パトリックの命日で、アイルランドでは法定祝日。アイルランド系移民が多いアメリカでも、聖パトリック記念日には、アイルランド系の人たちが国を象徴する色と考えている緑色を身につけて目抜き通りをパレードし、またアイリッシュパブに押しかけて無礼講を楽しむ。

ボストンには特にアイルランド系の人たちが多く、一九九〇年の聖パトリック記念日は土曜日だったので、例年よりも一層羽目を外した人が多かった。

ガードナー美術館は、ボストンの繁華街から少し離れたフェンウェイ地区にある。ボストン美術館も近い。近所には公園や病院、大学、研究施設、そしてそれらの駐車場が多く、住宅が少ないため、休日や夜間は人通りが絶える。

三月一八日の午前一時を過ぎた頃、ガードナー美術館の西側のパレス・ロードに面した警備室で館内の四台のビデオ・モニターを眺めていた警備員は、建物の外に通じるドアのブザー音で作業を中断された。インターフォンから「警察だ。この辺りでちよつとした騒ぎが起きたという通報があったので館内に入れて欲しい」という声が聞こえてきた。

夜間はドアを開けないようにという規則があったのだが、アルバイトの警備員はドアを開錠する。すると警官が二人入ってきた。一人は身長一七〇〜一七五センチくらいの男で、眼鏡をかけ口ひげがあった。もう一人は身長が一八〇センチを超えたガッチリ型で、年齢は三〇代半ば。こちらも口ひげを生やしていたが、警備員二人は後に二人の口ひげは明らかに付けひげだったと証言している。そのうちの一人が「警備員は一人だけか？」と聞く。もう一人いると答えると、警備室に呼ぶように言った。

館内をパトロール中だったもう一人の警備員を無線で呼ぶと、眼鏡の警官が警備員に向かつて「どこかで見たことがある顔だ。おまえに逮捕状が出ているんじゃないか。身分証明書を見せろ」と言った。警備員はびっくりして、運転免許証を見せようと警備室のデスクから離れて、ドアのそばに立っている警官の方へ向かつて一步を踏み出した。その時点で彼は、警察に繋がっている非常ボタンから離れるという過ちを犯してしまった。

次の瞬間、警備員は警官に手をつかまれてねじられ、身体を壁に押しつけられて、後ろ手に手錠をかけられた。警備室に戻ってきたもう一人の警備員も、同じように手錠をかけられた。警官たちはダクトテープで警備員たちの顔の目と口の周りをぐるぐる巻きにして、何も見えず、声も出せないようにすると、地下へ連れて行き、手錠をもう一つ使ってそれぞれを作業台とパイプに括り付けた。

二人はそれから二階の「オランダ室」へと向かい、まずレンブラントの〈ガリラヤの海の嵐〉と〈黒装束の婦人と紳士〉という二枚の大きな絵を壁から下ろし、額から外した。

〈ガリラヤの海の嵐〉は縦が一六〇センチで横二二八センチという大きさで、〈黒装束の婦人と紳士〉も縦一三一・六センチ、横一〇九センチと大きい。二人は貼ってある木枠からナイフでそれぞれのキャンバスを切り取り、持ちやすいようにした。三五〇年前の油絵の

具はかなり固くなっているだろうから、それが厚く塗られているキャンバスをナイフでカットしていく作業はかなり時間がかかったのではないか。実際、現場には絵の具の破片がたくさん落ちていたようだ。

《ガリラヤの海の嵐》は、ガリラヤ海（イスラエル北部に実在する淡水湖）を渡ろうとしたキリストと使徒たちの舟が嵐に巻き込まれた光景を描きだした絵で、レンブラントはこの絵を二七歳の時（一六三三年）に描いた。《黒装束の婦人と紳士》も同じ年に描かれている。この肖像画は描かれたカップルに依頼された作品である可能性が強いが、二人の身元はわかっていない。

《ガリラヤの海の嵐》の右側には、フランシスコ・デ・スルバランというスペイン一七世紀の画家による肖像画《サラマンカ大学の法律博士》が展示されており、その前の低いテーブルの上に中国（殷時代）の觚（青銅の杯。細腰で上下がラップ状に開いている／85ページ）が置いてあった。二人はその觚も一緒に盗っていた。

その後犯人たちは、レンブラントが二三歳で描いた自画像も壁から下ろしたが、額から外したところ、キャンバスではなく板に描かれたものであることがわかった。サイズも縦八九・七センチ、横七三・五センチと決して小さくはない。運ぶのが難しいと判断したの

だろう。彼らはその絵を床に放置した。これら三枚のレンブラントは、いずれもイギリス貴族が持っていたものだが、ガードナー夫人はコルナギという画商から購入している。

板のパネルに描かれた自画像の代わりだったのかどうかわからないが、犯人たちはその絵の下の木製キャビネットの側面に掛けられていたレンブラントの小さなエッチング作品〈若き芸術家の自画像〉（四・五センチ×五センチ）を盗っていった。

それから、犯人たちはサイズの小さなフェルメールの〈合奏〉とホーフェルト・フリントの風景画〈オベリスクのある風景〉に向かった。フリントの作品は暗い色調の風景画で、ガードナー夫人はレンブラントだと思って買ったのだが、一九八〇年代になってこの作品はその弟子のフリントの作品と認定された。

この二枚の絵には少し変わった展示方法が用いられていたもので、壁から外す必要がなかった。窓際に並べられた二つの小さなテーブル（正確に言えば、一つはテーブルというよりガラスのケース）の間に、茶色いビロード布で覆われた板が置かれていて、その板の両面に絵を一枚ずつ立てかけるような形で展示されているのだ。ちょうど、イーゼルを背中合わせに置いて、二つのイーゼルにそれぞれの絵を乗せ、その前の椅子に腰掛けて鑑賞できるようなスタイルだ。こういう展示方法はガードナー美術館では数カ所に見られるが、他の美

術館ではあまり見たことがない。目の前に置かれたフェルメールの〈合奏〉を椅子に座って鑑賞するというのは、サイズが小さく、絵に近づいて見るべきフェルメールの作品には適した鑑賞方法だったように思える。

現在は空っぽの額縁が背中合わせに展示されているが、二つのテーブルと椅子の周囲には人が近づけないようにロープが張られていて、そばに寄ることも、座ることもできない。犯行当日、犯人たちはこの二枚の絵の額縁のガラスを割って、額から絵を外して持ち出した。

犯人たちの不思議な選択

その後、犯人たちは「オランダ室」から階段のある廊下に出て、「初期イタリア室」と「ラファエロ室」を通り抜けて「シヨート・ギャラリー」と呼ばれているスペースへと向かった。「シヨート・ギャラリー」は展示室というより廊下のような小さなスペースで、ガードナー夫人と夫、それぞれの肖像画が展示されていて、書棚や飾り棚、木製のキャビネットなどが並んでいる。木製のキャビネットは、このスペースに合わせてドロ잉ング、スケッチ、水彩画などを保管するためにガードナー夫人がデザインしたもので、前面のド



イザベラ・スチュアート・ガードナー美術館2階の「オランダ室」。
ガードナー夫人の遺言により、新しい作品を加えることも、
展示位置を変えることも禁じられている。そのため盗まれた絵が
あったところには額だけが残されている。

©bridgemanimages / amanaimages

アが展示パネルになっており、そこには額に入った小品が数枚ずつ展示されている。ドアノブを引っ張ると扉が開くが、扉の内側も展示パネルで、作品が数枚展示されている。壁一面に作り付けになっているこの木製キャビネットには、このような扉が四枚付いているが、犯人たちは左から三番目の扉の外側にまとめて展示されていたドガの作品五点、いずれも紙に描かれた水彩画やスケッチのような作品の額を引き剥がし、ガラスを壊して、これらの作品を取り出した。

ドガが展示されていたドアの上には、セルゲイ・ディアギレフ主宰のバレエ・リュスのデザイナーだったレオン・バクストが、バレリーナのアンナ・パブロワのためにデザインした衣装の色彩豊かなスケッチが展示されていたが、それはそのまま残されていた。また、一番左のドアの内側にはミケランジェロのドローイング〈ピエタ〉が展示されていたのだが、それも無事だった。

それから二人は一階に下りて、正面入り口に近い「ブルー・ルーム」に入り、壁にネジで留めてあったマネの油絵〈トルトニ亭にて〉を引き剥がし、額縁とともに持ち去った。これは一八七五年頃に描かれた絵で、パリのカフェ、トルトニ亭のテーブルに座っている紳士のファッショナブルな山高帽と、こちらに投げかける視線が印象的な絵だ。ガードナ

―夫人が亡くなる二年前の一九二二年に購入した絵だった。この絵の上には同じくマネが自分の母親を描いた油絵が展示されているはずだったが、この絵は修復作業のため展示されていなかった。《トルトニ亭にて》の額縁は、警備員室の警備責任者の椅子の上に残されていたのが翌日発見されている。

これらの作業を終えると、犯人たちは二人の警備員の様子をチェックするために地下に下りてから、一階の警備員室へ戻り、ビデオの録画装置のスイッチを切り、中に入っているカセットを取り出した。展示室には、各部屋のモーションセンサーが人間の動きをキャッチして記録するタイプの警備システムが備えられていたが、彼らはそのスイッチを切つて、プリンタが打ち出したデータを破り取った。しかし、この装置の情報はハードディスクにも記録されており、後に犯人たちの動きが知られるようになった。

入ったのと同じ警備室のドアから犯人が外へ出たのは午前二時四〇分。そして同じドアはもう一度、二時四五分に開いて閉まっている。盗んだ品物を運び出すのに、二往復が必要だったのだろう。

こうして、史上最大の美術品強盗は八一分間で完了したのだった。

消えたフェルメール

朽木ゆり子・著

発 行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定 価：本体 860 円＋税

発売日：2018 年10 月 5 日

I S B N：978-4-7976-8029-4

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)